

常随給仕

弟子が常に師匠に随って仕えること

日蓮大聖人は、『御義口伝』に、
「随とは信の異名なり云云。唯信心の事を随と云ふなり」
と、随うとは信心であると説かれています。

御本尊様への、お給仕の手本は、法華経の『提婆達多品』に、
「果(このみ)を採り水を汲み、薪を拾い食を設け、乃至身を以って牀座(じょうぎ)と作せしに、身心倦(ものうい)きこと無かりき、時に奉事すること千載を経て、法の為の故に、精勤し給侍して乏しき所なからしめき」
と「採果汲水(さいかぎゅうすい)拾薪設食(じゅうしんせつじき)」という仏様への常随給仕が説かれています。

大聖人はこの御文を『御義口伝』にて
「採菓とは癡煩惱(ち)なり、汲水とは貪煩惱(とん)なり、拾薪とは瞋煩惱(じん)なり、設食とは慢煩惱(まん)なり、此の下に八種の給仕之れ有り此の外に妙法蓮華経の伝受之れ無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは即ち千歳給仕なり是れ即ち一念三千なり貪瞋癡慢を対治するなり。」と説かれています。

仙人(師匠)のために木の実を取るとは癡かなる煩惱をとることであり、水を汲むとは貪りの煩惱をとることであり、薪を拾うとは瞋りの煩惱をとることであり、食を用意するとは慢ずるころの煩惱をとること、このほかに八種類の給仕があります。それらは仏に仕えてお給仕することなのですが、これら以外に妙法蓮華経の伝授があるわけではありません。

これらの日常の作務を通してこそ、妙法は信解され命に入っていくのです。
今、日蓮大聖人が南無妙法蓮華経と唱えるのは釈尊が千年間阿私仙人につかえて修行したという事と同じことだと仰せです。
それは一念三千の法をもって己の貪・瞋・癡・慢を退治することなのです。

古歌にも、
「法華経を我が得しことは薪こり菜つみ水汲み仕えてぞ得し」
と、うたわれている骨おしみをしない、毎日の努力の積み重ねが観心なのです。

我々の御本尊様へのお給仕の心構えも、かつて御弟子方が影の形に随うがごとく大聖人に常随給仕を申し上げたように、信心の心をもってお給仕することを忘れてはなりません。

もとより、本宗は信心の宗旨です。特に勤行お題目と御本尊様へのお給仕は、信心をする者にとって基本中の基本であり、仏道修行の原点、なによりもまず、報恩謝徳の真心をこめた勤行とお給仕を心掛けることが肝要です。

御本尊様へのお給仕

御本尊様を御安置申し上げる心構え

『経王殿御返事』に、

「日蓮が魂を墨に染めながして書いて候ぞ、信じさせ給へ」

と仰せのように、御本尊様には日蓮大聖人の御魂が込められています。

御本尊様は、しっかりお護りできる状況であるかなど、住職から御指導をいただき、寺院で御授戒（入信帰正式）を戴いた後、お家に御本尊様をお迎えします。

御本尊様をお家に御安置する時は、大聖人様が我が家にいらっしゃるという気持ちで、お迎えすることが大切です。

お仏壇は、大きさや機能などにこだわる必要はありません。お家の中で、最もいい場所を選んで置くようにします。

お給仕の心構え

御本尊様をお迎えしたら、次に大切なのは、毎日お給仕をすることです。

お給仕とは、御本尊様にお仕えすることです。

毎朝、お仏壇をお掃除してきれいにし、お水とお飯をお供えします。

勤行の時には灯明をつけ、線香を焚きます。

このお給仕の一つひとつが、仏道修行となり、御本尊様への御供養となります。

ですから、朝一番にお水をお供えする、ご飯を炊いたときに仏飯をお供えする、朝の勤行の前にお花の水を替えるとか、家族と相談して、お給仕の役割を担当するのが良いでしょう。

御本尊様が御安置されている部屋は仏様のお部屋です。ボール投げをしたり、物で叩き合ったり、遊んだおもちゃをそのままにするようなことは慎み、いつも片付けてきれいにしましょう。

信は莊嚴より起こる

仏法では「信は莊嚴より起こる」といわれます。御本尊様を御安置している場所が莊嚴であると、自然に信心の気持ちが起こるということです。

御本尊様へのお給仕に当たって、一番大切なことは、

「些細の供養も一々宗祖御影の見参に供へて・如在の礼を本仏大聖に尽し給ふ」

と古来より先師の御指南があるように、「如在の礼」といって、本門寿量佛大曼荼羅ご本尊・生身の日蓮大聖人が眼前にましますと心得て、報恩感謝の真心こめて、丁重か

つ厳肅にお給仕するよう心掛けるべきです。

仏壇を掃除し、仏花（桜）を上げ、お水やお仏飯等をお供えし、毎朝、朝夕の勤行の時に、ローソクを灯し、お香を焚いて御宝前を荘嚴にします。

これはすべて御本尊様への供養なのです。

リンを打つときも、むやみに打つのではなく、真心こめて、御本尊様に音の御供養をするのです。

ローソクに火を灯すことも、御本尊様に明かりをお供えすることです。

また、私たちの迷い悩む、汚れた心を燃やして、仏様の智慧の火を輝かせる、という意味もあります。

線香を焚くことも、線香の清々しく、ふくよかな香りを、心から御本尊様にお供えするためです。

「朝々(ちょうちょう)仏と共に起き、夕々(せきせき)仏と共に臥す」(御義口伝上)という大聖人の御文の如く、「常随給仕」「信伏随従」して、毎日我が家の御本尊様と共に朝を迎え、また御本尊様と共に一日を終えるように心掛けることです。

お家の御本尊様に真心から真剣にお給仕し、勤行・唱題に励めば、御本尊様の無限の功德によって私たちの信心と人格もどんどん磨かれていき、さらに信心が深まって、ご本尊様ご安置のお仏壇にも輝きが増し、次第に心も綺麗に調っていき、生活も調っていきます。

信心第一の一信二行三学の順序ではありますが、行というおこないが肝心で、信を表わすには、日々の修行をもって顕わすほかありません。日々の生活を大切に御本尊様の慈悲に包まれて人生を歩んでいけることの有難さを感じましょう。

【三具足】

御宝前の荘嚴には、三具足又は五具足が用いられてきました。

三具足とは華・香炉（線香）・燈明（ローソク）各一つづつ

五具足とは華一對・香炉・燈明一對を並べます。

燈明は、死にして空諦(くうたい)を表わし、香は、中道境智冥合(ちゅうどうきょうちみょうごう)を表わし、華は、生にして仮諦(けたい)を表わすことで、三諦ということになります。

また、向かって右の燈明は、仏様の智慧の光（報身(ほうしん)）を表わし、左の華は仏様のお振舞い(応身(おうじん))、中央のお香は境智が冥合されている仏様の生命(法身(ほっしん))を表わしています。

お香はもともと香木を乾燥させて作ったものであり、左右の、燈明の炎と華とが合し

て、中央のお香の煙となります。そこに、智慧の報身と振舞いの応身とを兼ね備えた法身という、仏の三身のお姿を表わす意義があります。

古来「応身(おうじん)の華を香として、報身(ほうしん)の智火を以て十方法界に周遍す。故に法報応(ほっぽうおう)三身供養となる也」といわれています。

【お香 (線香)】

インドは熱帯的な風土のため、悪臭や虫などを防ぎ、体臭を除く目的で、香料を身体に塗ったり、衣服や部屋にふりまく風習があります。

法華経法師品をはじめ多くの経文の中に「抹香(まっこう)・塗香(ずこう)・焼香」などと説かれますように、行事を行う際、抹香(沈香・梅檀等を粉末にし、塔像に撒布して供養する)、塗香(仏体に塗る香)、焼香(邪気を払うため、所修の功德を至る処に行き渡らせるため焼く香)などの形で用いられました。

つまり、香の薫りをもって仏前を清浄にし、心の悪気を除き、身を清浄にするとの意を込めて、ご本尊様の御前を荘厳し、ご本尊様への供養とするのです。

天台大師の「一色一香無非中道」の言葉は、一切の事物に中道実相が具わっていることを示すとともに、香の薫りにもまた、中道法身(ほっしん)如来の徳があると解釈されます。お香を焚くのは、その香りが内に薫じると同時に、四方にあまねく広がることによって、周遍法界の法身(ほっしん)を表わします。

したがって、勤行唱題の時には、必ず真心をもってお香を焚くことが肝要です。

【燈明】

法華経薬王品に、薬王菩薩が自らの臂を焼いて、仏様に供養したことが説かれ、また、「貧女の一燈」といって、貧しい女性が仏に真心を込めて献じた一燈は、他の燈が消えても燃え続けた等の燈明供養の説話があり、その功德は深く、そして大きいことが説き示されています。

燈明は闇を滅し、明らかにすることから、法燈・仏燈・慧燈などとも称され、報身(ほうしん)如来・仏の智慧を表わします。

また、煩惱を焼き尽くし、法性の智火を明らかにするという意味もあります。

【お水】

「万物の根本は水である」といわれるくらい、水は人間にとって非常に重要です。そのお水を、朝一番に御本尊様にお供えすることは、とても意義深いことです。

仏教発祥の地インドは酷暑の国であるため、水は最も価値のあるものとして大切にされ、梵語では「閼伽(あか)」といい、功德水などと意識されています。

毎朝御本尊様に上げる水は、必ず清水、しかも早朝汲み初めのお水を御本尊様のお供え用として、台所で汲みおきし、朝勤行の前にお供え申し上げ、夕勤行の前にお下げします。

お供えの際には、正座し題目三唱の後、

「御本仏様・日蓮大聖人様、御報恩謝徳の御為に南無妙法蓮華経」と御観念申し上げ、鈴を三打して、再び題目三唱をします。

器に付いている蓋は、昼間はあけておき、夕刻お下げしてから、かぶせます。

大聖人様が、「水は垢穢(くえ)を浄むるを以て行と為す」(生死一大事血脈抄)と仰せのように、自らは汚れても、他を清める、即ち、汚れを取り除くのが水の力用です。

南無妙法蓮華経と唱えることによって自らの罪障が消滅していくことを、水が全ての汚れを取り去ってくれることに譬えています。また、水は高きより低きに流れますが、これは仏の慈悲が、仏界の高きより九界の低きまで、平等に流れていく姿を表わしています。

【仏花・檜(しきみ)】

法華経方便品には、「梅檀(せんだん)及び沈水(しんすい)、木檜(もくみつ)並びに余の材」と、白檀や檜などの香木を仏前に供養したことが説かれています。

色とりどりのあでやかに美しく咲く花などの仏花や、春夏秋冬少しも変わることなく、常に緑葉をたもち、豊かな生命力をあらわす常緑樹の檜もよいでしょう。

松、杉、榲などと違って、特有の香気を持つ日本唯一の香木であり、その香気は邪気を払い、不浄を清浄ならしめる力があるので、しきみは尊ばれています。

【仏前作法・御宝前の掃除】

お給仕の際には、仏様に息のかからぬようにします。

仏壇は仏様のお住まいでありますから、常に掃除をし、華の水の取り替え等、清潔、荘嚴を心掛けます。

仏壇の中に写真等は置かないようにします。

仏壇の上にも物を置かないようにします。

また、仏壇の真上に写真等を飾ったりしないようにして下さい。

御本尊様の御前では、きちんとした身なりを心掛けましょう。

私達が心を常に御本尊様へ向け、日常のお給仕や、寺院での掃除や奉仕などの作務を仏法と心得て励むことは

「一切世間の治生産業(ちしょうさんごう)は皆実相と相違背(あいいはい)せず」とある立派な仏道修行となり、我が身の正因、了因、縁因の三因仏性を養育し、成長せしめることになるのです。

【お靈膳】

ご家庭で、命日忌などを営むときには、仏供・お靈膳を供えるよう心がけたいものです。真心のこもったものであれば、なにを用いてもさしつかえありません。

ただし、原則としては、魚、肉、鳥、五辛(にら、らっきょう、ねぎ、にんにく、はじかみ)などはさけて、調菜料理すべきであります。

温かいお料理をお供えして、その湯気や香りを味わっていただきます。

また、下げたお膳は家族でいただくのが基本です。

お供えしたお膳をいただくことで、ご先祖様とのつながりを感じられます。

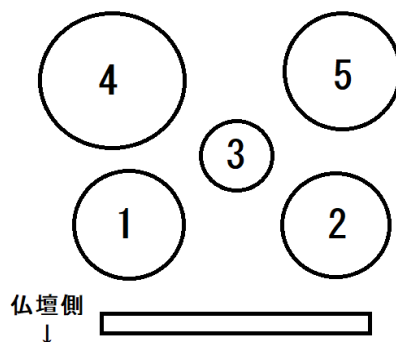
供膳は、ご本尊様・日蓮大聖人様へお供えすることも出来ます。

祭礼などの場合には、御飯は赤飯を用いたり、大聖人の月命日や御法難のご聖日などの日に供膳をご用意することは大変良いことです。

合掌礼拝し、お上げしますが、その後は上げたままにしないで、直ちに下げるのがしきたりです。

お靈供の並べ方と向き

- 1 飯椀
- 2 汁椀
- 3 高坏
- 4 平椀
- 5 つぼ椀



お膳はお箸の位置が仏さま側、仏壇側に向くようにします。

- 1 飯椀

白飯もしくは炊き込みご飯

- 2 汁椀

お味噌汁もしくはお吸い物

カツオなどの動物性ではなく、昆布や椎茸で出汁をとります。

- 3 高坏

酢の物もしくはお漬物

- 4 平椀

野菜の煮物

五種盛りといって5品ですが、その時揃うものでよいです。

- 5 つぼ椀

和え物、お浸し、胡麻和え、煮豆。